



# 点呼を I T 化して 業務の質を高める

I T が支援する点呼品質  
すべての点呼はデータで確認

## CASE 16

### 点呼管理システム

平成 19 年から G マーク取得事業所においては I T 点呼が可能ではあったが、深夜、早朝に限られるなどの要件により、活用度は低いと考えていた。しかし、23 年のアルコール検知器の使用義務化や、I T 点呼の要件緩和などを踏まえ、「遠隔地点呼」だけでなく、「対面点呼」においても I T を活用する方式に転換し、点呼の質を飛躍的に向上させた。



## 課題・ニーズ

### ■ 点呼そのものをIT化したい。

当時、IT点呼の条件は閑散時間帯に行うことが原則になっていたため、これまで全体の数%しか実施できなかった。あえて対面点呼を遠隔地点呼と同様の仕組でシステム化して、すべての点呼をIT化して、より活用度の高いシステムにしたい。

### ■ 点呼者によって内容が変わらないようにしたい。

事例企業の点呼実施者は、事務所スタッフで若手の運行管理者である。点呼は、父親のようなドライバーを息子のような点呼者が点呼をしているため、きちんとやっけてはいるものの、運行管理者としての監督指導としての点呼を考えた場合には、やりにくい面もあった。このため、IT点呼を活用することで、点呼の様子や点呼項目をすべてデータとして記録し、「点呼者が誰であっても質の高い、すべての管理項目を網羅した点呼」ができるようにしたい。

### ■ 安全に関する取組は他社に先駆けて実施したい。

点呼をIT化して、安全性を高めることができるのであれば、コストをかけてでも他社に先んじて導入し、安全向上をアピールしたい。

## 会社情報

営業所数：5、車両台数：100（ウィング、トレーラー、大型）

自動車部品、紙製品、電子部品、金属材料、食品、日用品。

金属材料から食品まで様々な貨物を輸送。長距離も約半数。



## 導入効果

### ■ 点呼管理システムにより点呼の質が高まった。

点呼者がすべてのドライバーに対し同質で証左（Evidence）を残せる点呼が実施できるようになった。点呼記録はデータベース化しているので、いつでも管理者やトップが点呼状況を確認できるようになった。

■ 運行管理者のリーダーシップが高まった。

データや映像として記録に残り、点呼状態を後で確認できるようになったことで、「社長もこの映像を見る」システムであるとの印象から、年長のドライバーに対しても点呼項目をしっかりと確認し、指導監督する立場からコミュニケーションできるようになり、安全強化項目の確認や、注意事項の徹底など、運行管理者として必要なリーダーシップが向上した。

■ 安全性が高まったことを実感できる。

運転免許証所持、アルコールチェッカーの検査値、点呼時の映像、ドライバーへの確認事項等、実際にいつでも確認できる証拠としてのデータが残せるようになり、ドライバーの意識も高まったことで、事例企業の安全に対する姿勢が形にできたことを実感できる。



## システム概要

事例企業の点呼管理システムは、サブシステムとして、4つの機能を持っている。免許証確認機能、アルコールチェッカー機能、対面点呼機能、遠隔地点呼機能である。これらを組み合わせ、すべての点呼をこのシステムで実施している。



■ 免許証リーダー

点呼のスタートは、免許証リーダーである。ドライバーが免許証リーダーを読ませると、免許証からドライバーを識別し、有効期限のチェックを行い、ドライバーの写真をパソコンの画面に表示して、点呼のスタートとなる。

■ アルコールチェッカー

免許証リーダーで本人認証を行った後は、アルコールチェッカーである。アルコールチェッカーは、呼気をストローで吹き入れ、アルコール濃度を検知する。アルコールを少しでも検知すると、ブザーがなり、パソコンの画面にはアルコール濃度が数値で表示される。

氏名：山田 正 測定値

**0.02** mg/l

**アルコールを検知しました。**



アルコールチェッカーを実施したドライバーが、本人であるかどうかは、パソコンの画面で確認できるようになっている。アルコールチェッカー実施の画像も記録される。

2011/ 3/ 2 (水) 14:51:11

No. 293 測定値

氏名 山本 正

メッセージ 測定中

No	氏名	測定値	測定日時
97	164 山本 正	0.00	2011/03/02 08:11
98	342 田中 次郎	0.00	2011/03/02 09:33
99	92 吉本 武雄	0.00	2011/03/02 09:45
100	5 新庄 義男	0.00	2011/03/02 10:34
101	461 草壁 大樹	0.00	2011/03/02 10:40
102	50 松本 弘	0.00	2011/03/02 10:53
103	334 内田 秀二	0.00	2011/03/02 10:58
104	447 藤本 正樹	0.00	2011/03/02 12:01
105	195 橋本 次郎	0.00	2011/03/02 12:10
106	136 戸田 純一	0.00	2011/03/02 12:55
107	68 矢野 喜太郎	0.00	2011/03/02 13:00
108	81 橋 真理	0.00	2011/03/02 14:27

免許証情報 免許証を読み込みました 平成24年08月10日まで有効 免許更新日まで528日です

■ 対面点呼

免許証チェックとアルコールチェックが完了したら、点呼を実施する。対面点呼では、点呼実施時の動画を撮影するために、運行管理者用とドライバー用に対面で2台のカメラが用意されている。撮影しながら、点呼業務を行っていく。確認事項は、点呼記録として登録される。対面での点呼は、乗務前と乗務後に行い、点呼項目としては、運行指示内容、日常点検、健康状態、疾病有無、服装、備品チェックなどである。運行管理者は、項目毎にドライバーに質問し、ドライバーと内容確認を行った項目には、確認済みのマークを入力していく。



### ■ 遠隔地点呼

G マーク取得事業者は、1 営業日の連続する 16 時間以内であれば、営業所間で I T 点呼が認められている。このシステムでも遠隔地用の I T 点呼の機能を持っている。遠隔地営業所でも同一のシステムが設備されており、営業所間はインターネット光回線で接続されている。遠隔地点呼を行う場合は、両営業所の点呼システムを起動して、運転者が対面点呼と同様、免許証チェック、アルコールチェックを終え、遠隔地の運行管理者とカメラとマイクで対話しながら点呼を実施する。点呼項目については、対面点呼と同じである。





## コスト・期間

### ■ コスト

項目	費用
I. ハードウェア(5営業所分:各5式) アルコールチェッカー 免許証リーダー 管理用パソコン カメラ(1式3台)	500万円
II. ソフトウェア 点呼管理システム	200万円
合計(導入一時費用)	700万円
III. 保守料(年額) アルコールチェッカー 点呼システム保守	12万円

### ■ 導入期間

導入フェーズ	期間
I. 導入 システム検討及び導入	3ヶ月
II. 運用 運用と活用	3ヶ月
合計	6ヶ月



## 成功要因

### ■ 業務ニーズの視点から点呼を考えた。

業務ニーズの視点から見れば、点呼の質を高め、日々の運行管理体制をさらに強化して、安全のレベルアップを図るということである。貨物自動車運送事業関係法規の改正を契機に、「IT点呼システム」が数多く販売されているが、当初は「IT点呼」と言いながら実は早朝・夜間のみの遠隔地間の「閑散時間帯点呼システム」としてしか活用できなかった。事例企業は、根本から見直し、「安全運転管理のた

めの点呼業務の質の向上」というテーマで、様々なメーカーの機器を比較し、機能を検討した。その結果、免許証確認、アルコール呼気検査、対面点呼、遠隔地点呼、点呼管理業務等を確実に実施するには、「点呼業務全体をカバーするシステム」を導入すべきとの結論に至った。そしてシステム業者に様々な注文を付け、提案を検討し、事例企業の業務ニーズを満たす「点呼管理システム」を完成させた。

### ■ 「点呼の質の向上」という視点からスタートした。

事例企業で実際に行われている日常の点呼を分析し、若い運行管理者とベテランドライバーという場面においては、適切な指導が行いづらい側面があること、また、点呼の記録が法律上の「点呼記録簿」という最低限度の記録だけしかないことから、点呼実施内容を後から監査するには、不十分な記録であるという事実から、点呼業務そのものを見直すことになった。点呼の実施項目が確実であること、点呼の実施記録を証左（Evidence）として残し後日監査できること、という観点からIT化を考え、メーカーが用意している機能要素として、「免許証リーダー」、「アルコールチェッカー」、「IT 点呼」を組合せ、統合した結果、「点呼管理システム」を開発し、「点呼の質の向上」を図ることとした。これは、ユーザー側の視点によるシステム化といえる。



## 失敗のリスク

### ■ 自社の導入目的を明確にせず、システム販売会社にお任せで導入する。

アルコールチェッカーやIT点呼に対応した製品は、法規格との関係が深い。機器メーカーは、法規格準拠であることを重視しがちであるため、ユーザー毎の多様なニーズをすべて満たすことは難しい。自社のニーズや導入目的を明確にしないまま、システム販売会社に勧められる製品をお任せで導入しても、限られた成果しか得られない。IT導入は経営の目的を達成するための手段である。

### ■ ドライバーの監視強化と思われる。

荷主からの値下げ圧力、燃料高騰、道路交通法強化等々、ドライバーは様々な規則に縛られ、且つコストダウンを求められている。このような機器導入がドライバーの監視強化と捉えられた場合、モチベーション悪化が起きてしまう。導入時に十分な議論をし、納得してもらわなければ、狙った効果は期待できない。